

社内標本の活用事例

榎本 拓司（ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社）

1. 標本をつくる活動と意義

関西支社にはさまざまな哺乳類標本が収集され保管されている。

興味のある社員有志で構成された標本ワーキンググループは、収集保管されている標本のラベルを作成したり、冷凍保存されている動物個体の除肉作業を行い骨格標本を作製するなどして学術標本として適正に収蔵するための作業を行う。

標本として収集されるほとんどの個体は、自然界で暮らし生きていた日本の野生動物である。収集される個体は、交通事故で死んでいたものや、許可捕獲等によって殺処分となったものである。許可捕獲等により回収された個体は、人の生活や暮らしを守るためにその命を奪うことになった動物の亡骸である。

許可捕獲等で亡骸となった動物は通常、焼却処理をされる。しかし、単なる焼却（ゴミ的な扱い）となる事に疑問を持った関西支社の社員有志は、野生動物の亡骸を標本にして有効活用の道を模索するようになった。そうして標本ワーキンググループは結成された（詳しくは FieldNote No.155&No.157）。

さて、許可捕獲等の対象となる動物は、シカ・イノシシ・カワウ・ニホンザルなどさまざまである。ニホンザルは、群れ管理を行う必要があるため、場合によっては大型檻を用いて群れのほとんどの捕獲を行う事もある。

ニホンザルの群れは、母系社会による集団を形成し、その地域固有の形態情報を持っていると考えられる。そのため、群れの大部分が標本として保存されていることは学術標本的な価値が高いと見込まれる（FieldNote No.155 より）。

標本ワーキンググループでは、捕獲個体の有効活用をテーマに大型檻捕獲で生じるサルや頭部骨格の標本作成や博物館等への提供を中心とした活動を実施している。

2. 野生動物へのイメージを考える

私たちは仕事の場面で、生きている野生動物と向き合うことが多い。自然界で生きる野生動物を目にするとその行動や生き方に感動する。その魅力を知っているから野生動物が社会に広く認知されることはうれしいと思う。

昨今のクマ騒動を背景に、野生動物への関心が高まりを見せている。しかし個人的に残念に思うことは多くの人が「危険らしい」という情報に引っ張られていることである。私の住む地域では寄合いや会合などの集落行事に行けば、軒並み野生動物に関する話が出るが、とにかく「怖い」や「危ない」という情報ばかりが目立って集まりやすくなっている。インターネット界限では、野生動物は積極的に人を襲うという偏った情報も見られる。動物というと触れ合い番組のイメージを持つ人もいる反面、野生という言葉は未知に対するものへの怖さをより引き立ててしまう面もあるのかもしれない。私の住む地域に限らずきつと今多くの地域でも同じように野生動物へのイメージは「怖い」という感情に支配されているように感じる。「らしい」という実体験に基づかない情報が先行することでますます軋轢が浸透していくようで残念に思う。

都市圏に比べれば中山間地域のほうが、野生動物との軋轢に遭遇している回数は高いと思うので、まずは地域の方に向けて、「動物のことを知らな

いが、危険らしい」という偏った誤解を解き、正しく知ってもらう必要があると感じている。対策研修会では、なかなかそのような視点を伝える機会が少ないのも私たちの課題なのだろうかと感じている。いま軋轢を減少させるためには、対策だけでなく野生動物に対する理解の醸成も同時にすすめていくことも大切ないではないかと感じている。

3. 野生動物を伝える標本ワークショップ

ニホンザルやツキノワグマなどに襲われるという報道が連日ニュースを賑わせていた昨年、京都府南丹市で活動されている2つの地域団体から、野生動物のことを知りたいのでワークショップを開いてくれないかという相談が舞い込んだ。

その2団体はそれぞれ京都市にあるゴー！ゴー！ワクワクキャンプ（敬称略）と、南丹市にある天引村地域資源協議会（敬称略）という地域団体である。それぞれ地域に根差した活動をされている。ゴー！ゴー！ワクワクキャンプは南丹市にある古民家を会場に集落地域と連携し、子どもたちに保養キャンプを行っている。また、天引村地域資源協議会は南丹市園部町天引地区に所在し、地区の地域資源を活用した体験事業や農家民泊事業を手がけられている団体である。

最初に話を頂いたゴー！ゴー！ワクワクキャンプの担当者の方に話を伺ってみたところ、地域に出没する可能性のある野生動物について知りたいとのことだった。滞在する子どもたち向けのワークショップやイベントをボランティアで毎年実施しているが、今回は参加希望の子どもたちから野生動物（特に今話題のツキノワグマ）について知りたいという要望が出ているということだった。

天引村地域資源協議会の担当者の方からは、地域での獣害が酷いが地域をどうやって守っていくのかを真剣に考えていきたいという想いを共有していただいた。また、野生動物を敵対視し根絶するように対峙したいのではなく、対策を取りなが

ら共存する方法を模索していきたいという想いを持たれているとのことで、野生動物との関わり方について、連続講座を開催したいとの相談をWMOに頂いた。その連続講座の1回目として標本ワークショップを実施する運びとなった。

2つのご依頼には標本ワーキンググループのメンバーでもある林と浅見が講師として担当し、ニホンザルの頭部骨格標本をはじめとした、社内で保管している各種動物の標本を活用するワークショップを実施した。下記にそれぞれのワークショップについて報告する。

4. ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ「野生動物ワークショップ」

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプは、京都市にある団体である。2011年に発災した東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故により放射線量が高くなってしまった地域で暮らされているご家族を対象に2011年から継続して開催し、今年で15年目の保養キャンプを開いている。すべてのプログラムはボランティアで行われている。

標本ワーキンググループメンバーによる野生動物ワークショップは、2025年8月16日に行われた。南丹市にある古民家を会場に、参加者11名が集まった。私はこの古民家の管理をさせていただいている関係で当日は参加者側として参加した。イベント参加者の目線で報告をさせていただけたらと思う。

元かやぶき屋根の広い屋根柱のある造りで、襖を取り払った畳座敷に机を並べて座学が始まった。はじめにツキノワグマに遭遇したことがある人は？との問いがあり、目撃や遭遇をした事がある子ども達は居なかった。そこでツキノワグマの大きさについて選択形式でクイズが出され、想像されるイメージ上のクマと、実際のクマの体重や大きさが違う事を学んだ。参加者からは「へええ」という声上がり、特に大人からは「自分が想像していたものと違うんだという事が分かった」と

いう感想も出ていた。

次にセンサーカメラに映るツキノワグマの動画を見てツキノワグマの能力の紹介があり、実際のクマの姿を目に想像力を高めてから、クマ頭骨やJBN（日本クマネットワーク）からお借りした毛皮を触りその感触を確かめさせてもらった。ここで再び選択形式のクイズがあり、ツキノワグマは一体どんなものを食べているのか？という問いには、わりとみんなが正解した。食べるものによって糞にも違いが出る（写真1）ことは知らなかったようでここでも「おもしろい～」という声が



写真1 クマの食べ物と糞



写真2と3 クマとシカ、イノシシの歯の形状や本数の違い

聞こえた。またクマ・シカ・イノシシの頭骨を見ながら食べるものによって進化の過程で頭骨の歯の形状も違いがあることを学んだ（写真2）。食べ物によって頭骨の特徴にも違いが出てくるのは面白かった（写真3）。

ツキノワグマの生態やいろんな動物の違いを座学形式で学んできたが、ここからは標本ワーキンググループが作製しているニホンザルの頭部骨格標本を使うワークショップが始まった。ニホンザルの頭骨というのはなかなか珍しいようで、はじめは恐る恐る触る大人も多かった。頭骨はヒトと似ているが、ヒトとは違うこともわかってホッとしている子もいたようだ（写真4）。



写真4 ニホンザルの頭部骨格標本

座学ではスライドや標本を見ながら学ぶ形だったが、ワークショップでは参加者の座っている机の上には、1人につき1つのサルの頭骨とバラバラになった歯が配られた。これをパズルピースのように頭骨に差しはめていく作業で、手を動かしながら年齢や性差の歯の形状の違いを発見していけるのがおもしろかった。はじめは全くよく分からず歯を持ったまま眺めている子もいたが要領を得たようで、周りのみんながしている作業を見ながら当てはまるところに差ししていく。いつの間にか木工ボンドを片手に黙々と集中してやっていたのが印象的だった。不思議と歯はピッタリとはまるところが正しい位置になり、無理につけるとおかしい歯並びが出来上がるものだ。

みんなそれぞれに年齢も性も違う頭骨を触って組み立てているため、隣同士で見比べることで、

0才からオトナまでのサイズ感の違いだったり、オトナオスとオトナメスの犬歯の大きさの違いがよく分かる。子どもの歯の中には乳歯の奥に永久歯が隠れていたり、びっくりの仕掛けもあった。徐々に頭骨の歯並びが完成してくる。そこでこの頭骨は生前は何才だったのか？を調べてみようというシートが配布された(写真5)。歯の大きさから乳歯や永久歯の違いを見たり、歯の萌出の順番や、生きていた時に歯を年数をかけて使っているのが削れている様子等を見る。講師の方がそれぞれのテーブルをまわりながら説明してまわっていくと、これはマニアックだけどおもしろかったらしく、あちこちのテーブルから「へえ！」とか「え!？」とか声が飛び交っていた。マニアックさが際立っていたので、どちらかといえば子どもたちよりも大人のほうが盛り上がっていたようだ。



写真5 ニホンザルの歯から年齢推定ワーク

野生動物ワークショップは全体を通して1時間半ほどだったが、あっという間に時間が過ぎていった。参加者の年齢は小学生から高校生、大学生、大人という・・・かなり年齢層の広いものだったので講師のお二人も内容を考えてくださるのに大変だったのではないかなと思う。動物を知るために写真を見るだけではなく、標本という実物にたくさん触りながら「なぜ骨はこうなっているのか」や「歯は食べることに合わせて特徴が出る」ことを学ぶことができたのではないかなと思う。それは野生動物の生き方を知ることにつながっていくと感じられた。

参加者から後日聞いた感想を紹介すると、「テレビとかニュースで知るクマとは違う面がある事

が分かった」というものや「骨や歯から動物の暮らし方がすこし見えてくるのが面白かった」などの感想があった。特に大人の方からは、「濃い内容で小学生には難しいのかな?と思う場面もあったが、ニホンザルの頭部骨格標本のワークショップを別の機会でもやってほしい」という感想も聞かれた。子どもたちのリクエストどおりにツキノワグマをはじめ日本の野生動物について知る良い機会になったのではないかなと思う。

5. 天引村地域資源協議会「野生動物との関わり方ワークショップ」

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプでの活動に続き、標本を用いたワークショップを天引村地域資源協議会でも開催する運びとなった。本講座は全4回の連続講座として企画され、地域の野生動物問題をマクロな視点からミクロな視点まで段階的に深掘りし、地域社会としての関わり方を考えてみることを目的としている。

ワークショップの構成は以下の通りである。

- 第1回：標本を使ったワークショップ：野生動物への関心喚起……頭骨標本を直接手に取り、動物の頭部の構造から生態を紐解く。
- 第2回：里山で動物の痕跡を見てみよう：痕跡調査……フィールドワークとセンサーカメラを通じて天引地域に生息している動物を調査する。
- 第3回：クマの生態についてボードゲーム：クマとの付き合い方……今話題のクマ問題をテーマに、ゲームを通じて自然との付き合い方を考える。
- 第4回：クマのゾーニング管理を考えてみる：ゾーニング管理と対策……天引地域でクマのゾーニング管理を導入すると仮定し、誰がどのような対策を担って地域を守っていくかを議論する。

この全4回のワークショップの記念すべき第1回目で、地域住民が野生動物の骨を通じて動物に関心を寄せるワークショップを実施した。座学やワークの内容自体は「ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ」とほぼ同じ構成で臨んだが、参加者が少なかったことで、結果としてワークの質はより濃密なものとなった。講義形式の一方的な情報提供ではなく、参加者一人ひとりの顔が見える距離で、ワーク中も双方向の対話が絶えず交わされた（写真6、7）。



写真6 テーブル一つを参加者で囲むため
近い距離での対話を通じてワークは進んだ



写真7 サルの頭骨への歯の差し込み

専門家が持つ科学的な見地と、地域の方々が持つ野生動物への印象、その双方が混じり、意見交換されるプロセスは、ゴー！ゴー！ワクワクキャンプとはまた異なるとても意義深い場となった。こうした、一見野生動物管理・獣害対策などとは異なるテーマを切り口に話題提供をすることは、これらの問題への関心の薄い人々の興味を喚起させるためには良い方法であるとも実感した。

6. 標本は野生動物を理解するツール

2つの地域団体での標本ワーキンググループメンバーによる講座事例を報告させていただいた。両ワークショップの開催については各団体の担当の方がお声がけくださったご縁により実現できたものである。

社会問題となっている野生動物への見方を変えるためにも、このような講座の重要性は高いと考えられる。標本は野生動物の生態を科学的に伝え、正しく面白く理解をすすめるツールなのだと感じた。

社内で保管している標本の活用が、専門的研究や遺伝解析のため（それも重要と思う）だけではなく、地域の方々に野生動物を伝えるツールとして広く有効活用できるということを強く感じた。社内標本およびニホンザル骨格標本を利用したの社外向けの講習会はこれまで少なかったと思われるが社会の関心の高まりとともに、このような標本の活用法に今後期待が高まりそうだと感じた。

7. 結びに

今回のワークショップでお世話になったゴー！ゴー！ワクワクキャンプと天引村地域資源協議会のご担当の方に、機会をいただいたことにこの場をお借りして感謝申し上げます。また、両ワークショップの講師を務めてくださった林・浅見（敬称略）のお二人にも感謝いたします。社内標本の作製については、両氏がボランティアでプライベート時間を使って作製しているものです。

講師は準備が大変かもしれませんが、今回の事例のような取り組みがもっと広がってほしいと思っています。

このフィールドノートを読んで下さり興味を持たれた地域の方がいらっしゃいましたら、ぜひワークショップのご依頼は WMO へお声がけいただければと思います。